47

医聖永田徳本——その医術の位置づけとP.A.パラケルススとの対比を中心として

山田英雄[1]・山内一信[2]

[1]独立行政法人国立病院機構東名古屋病院内科
[2]名古屋大学大学院医学系研究科医療管理情報学

永田徳本（一五一三～一六三〇）は曲直瀬道三とともに戦国から江戸前期にかけて日本の医聖と呼ばれた医師である。詳細な点が不明の点が多いが本報告ではその医術の特徴と西洋のP.A.パラケルススとの対比を中心に報告する。［誕生から没年までの生涯］生地は三河（碧南市大浜町）とするものの他、信濃、美濃、甲斐、肥前松浦など諸説がある。翁の幼少時の事は不明であるが、少年の頃常陸の鹿島に行き、出羽の僧残夢を師として、神仙術を学ぶとともに、医学を月湖の弟子玉鼎に学んだ。又、田代三喜を師として李朱医学を学んだと云われる。そして後漢の張仲景の傷寒論をもとに徳本流の一派を起し、傷寒論の治療を広めた。各地に遍歴し、いつも頸に薬袋をかけ牛の背にまたがって「甲斐の徳本一服十八文」と叫んで諸国を回遊した。大永から享禄の頃（一五二一～一五三一）、甲斐から信濃に赴き、武田家（信虎）や御子柴家に寄寓した。寛永二年徳川秀忠が病臥した折、往診し、その難病を全快せしめたエピソードは有名である。翁は植物学にも精通し、甲斐の葡萄の改良法を教え、今日の甲州葡萄の礎を築いたと云われる。天正十年翁が京都に滞在中、曲直瀬道三と会い医学上の論議を闘したと云う。又、友人の林 信友の子、林 信忠（後の林 羅山）の教育を頼まれたが、その天才を見抜き藤原惺窩を紹介したエピソードも有名である。最後は信州諏訪の東堀村に住み、寛永七年二月十四日百十八歳の生涯を閉じた。［永田徳本の医術］翁の医学はその著書「醫之辨」「薬物論」「知足齋十九方」などを参照すれば判るが、曲直瀬流の温補法を否定し、金元医学を否定し、前述の張仲景の「傷寒論」をとり、好んで水銀、黒鉛、辰砂の入った峻

剤の頓服を勧めた。後の江戸後期に古方派が盛んとなった時、徳本の医学も再評価された。翁の病理観は傷寒論の本義に則り、万病は体内の鬱滞によって起るとし、これを散らすため峻剤を用いた。「薬は毒ありて劇しきがよろし」を理念とし、各種の吐剤、下剤、発汗剤を用いた。翁は癩病の治療も手がけ大風子を用いた。又梅毒の治療も行い辰砂（水銀化合物）を用い成功した。［永田徳本とP.A.パラケルススの対比］永田徳本とP.A.パラケルスス（一四九三～一五四一）はほぼ同時代人であり、両者の行跡もよく似ているので主な共通点を文献より以下に要約した。第一の類似点は両者の放浪癖である。晩年と最後は徳本が大変安らかであったのに比し、P.A.パラケルススはザルツブルグの悲惨な最後は対照的である。第二の類似点は両者の知的背景であり、徳本の仙術とP.A.パラケルススの錬金術である。仙術は西洋の錬金術である。徳本の手によって日本の仙術は薬物学の基本となり、日本近代医学にひき継がれて行く。一方P.A.パラケルススは西洋のルネッサンス医学の幕を開き、薬物学、医化学の祖となり、医薬として、酸化鉄、水銀、アンチモン、鉛、銅、砒素等の金属化合物を用いた。第三の類似点は両者の古い医学に対する強い反撥の精神であり、徳本は李朱医学を排し、張仲景の傷寒論を奉じたのと、P.A.パラケルススがバーゼル大学でガレノスやアヴィセンナの著書を焼き払った気概がよく似ている。第四の共通点は両者とも植物学に造詣が深かったことであり、徳本翁が漢方植物の採集に山野を跋渉したのは当然として、P.A.パラケルススは植物研究に熱中していた父（医師）から植物の実物教育を受けたと云われる。［おわりに］戦国から江戸前期の激しい変遷期に日本各地を放浪し、医術を学び、独自の創意工夫に基づく十九方をもって人々に「傷寒論」の治療を施して歩いた仁医永田徳本は日本の扁鵲であり、日本のパラケルススであった。